



俳諧炭俵集注解
伸



依沼岸徳集注解 下

玉 韻

利 年

子と裸をてくれと早と毎舟

てと又てらとと孫の刃う粒をて一説に裸

とふ農やあひを果とるら如く口果と果

と果はてらと多穀畑の下すみ爺はてれ

て女ハ二布てと何し身軀中ら詩に鋤木

日當年汗滴木下土誰出艇中食粒と

皆辛苦とあはれん茶やてり

岩のいゝゝのらあゝ 嘆 也 彼

市に強氣にふるをさす月夜の志人ふらん
 ねほや天川へ入るるくらゐ通り地味
 くらゐのうらなを共々詞こそあれさのるねらこ
 人こそをなれりてはるれもやまゝはなれ
 仁平次こそよくもふさふさこそはま所の
 入るるをなれりてはるれもやまゝはなれ
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと

川原のさすまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと
 一とあつたまよひの移りゆくやうと

甲二三糸の衣巻をたすをゆひに
 追憶或は新喜舟をたすをゆひに
 官田録の山莊東門をたすをゆひに

ら別を以て十数人昇殿有り一人と七八
四十一と云ふやと稱するに之れを以て之れ
坊に之れを以てし下級の御人。十年官ハ左
右六年左右申年左右少年権官を人乞
せしこれ七十年と云ふ七早に象を以て職
原がこゝれし

本を以てしすはとら 申度

并に其を以てしすはとらと云ふに
了十三人とも花無ふと云ふ能く其を以てしす
別を以てしすはとら之れ何れを以てしす

多路人の群自來のち其の上へはを以てしす
言りしは

日乃何しす方ハありし其の世に

此の世の外に其を以てしすはとら
一廻りの内と云ふし其の世に其の世に其の世に
又其の世に其の世に其の世に其の世に其の世に
其の外に其を以てしすはとら

只其の世に其の世に其の世に其の世に其の世に
其の世に其の世に其の世に其の世に其の世に
其の世に其の世に其の世に其の世に其の世に

つらりと来理

はるかに供らうし人の世にほく利牛
氣づくの布ききぬりやまはりのたき
るれい氣供らうと寒暖と那とまはる
つらまおし。のい氣供は三月廿七日
ははたふのくまのいれまはる
供おとまはる

がのいせにのいせのいせに
^{かたが}骨痛うせまう人せまういせにまはる

〇二〇。冬に二月二〇のいせに
まはる

ぼりーあしに挽くいせに 孤を

まはるの體をまはるいせにまはる
まはるのあつものいせにまはる
あしにまはるの敷をまはるいせにまはる
うまはる

まはるゆに挽くいせにまはる利牛
まはるまはるいせにまはる困窮まはる
まはるまはるいせにまはる母親の

い破落の事なりと云ふは、
孫勝の事なりと云ふは、
娘ハ此れを夫と云ふは、
可し護りて、
よ法をせん

蘇羽の事ハ、
蘇羽

此の事ハ、
物ハ、
つゝ

九
蘇羽の事ハ、

蘇羽の事ハ、

蘇羽の事ハ、
付、
切、

蘇羽の事ハ、

蘇羽の事ハ、
蘇羽の事ハ、

如蟻其穴の倒しけり柱くづ六 聖皮

夕歌日暮し〜〜陶ののりなる〜〜の

ち〜〜早おされ〜〜か〜〜良の根

を蟻う〜倒して〜志命〜と赤柱を倒れ

〜〜咳〜金猪〜口和ふ折〜〜

食糧曰盤と何〜

く〜〜物〜〜は〜〜夜〜夜 孤を

か〜の常〜是自の何〜田内〜のふち境内〜

〜〜権お或〜さ〜さ〜物〜〜は〜

〜〜物〜〜は〜〜と〜

瘡と〜〜物〜〜は〜〜付〜〜ら 州半

物〜〜は〜〜物〜〜は〜〜物〜〜は〜

〜〜れ〜〜物〜〜瘡〜〜口〜〜

〜〜れ〜〜物〜〜は〜〜と〜〜

〜〜物〜〜は〜〜

為〜〜物〜〜は〜〜物〜〜は〜〜

瘡〜〜物〜〜は〜〜物〜〜は〜〜

〜〜物〜〜は〜〜物〜〜は〜〜

〜〜物〜〜は〜〜物〜〜は〜〜

は〜〜物〜〜は〜〜物〜〜は〜〜

花菱の鼻はさうなつて、ゆきも成りき
り夫々のあまもあふ下海の浪もあまを
うかすやうな詞を記

と都くは神のしらた井れを 列女

夫々のあまもあふ下海の浪もあまを
うかすやうな詞を記

と都くは神のしらた井れを 列女

と都くは神のしらた井れを 列女
夫々のあまもあふ下海の浪もあまを
うかすやうな詞を記

すくはれよ女のあまを 孤を

すくはれよ女のあまを 孤を
と都くは神のしらた井れを 列女
夫々のあまもあふ下海の浪もあまを
うかすやうな詞を記

と都くは神のしらた井れを 列女
夫々のあまもあふ下海の浪もあまを
うかすやうな詞を記

上段の字の
又此の字の
の字の
半信可也

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

上段の字の

きまむ可ふる人ともやういふにあふ
口糊やういふ

狂や荒海多やうの類 孤を

さういふと女第にうれとさけ四かや
量人ういふに浦星うれとさき流さか
何やうもだくありて寝くこと口狂打し
潰は不洞の傳にあふ山の名く海やう和
名おし水や海蘊赤原木ふ名うら
出さういふ

扶 婦よふ天香とてなぐ 起何う 地 埤

あまきさの映る一。此の映るあまきさの
かまゆりやそ相をさういふとさういふ
物やねくこまへより起さういふは依て
けりいふとさういふ。荀子の蚕卦と
三の三起食桑而吐糸と云う

小 糸のまゝに此の糸をけりけり 糸を
糸の織やういふとさういふとさういふと
糸の織やういふとさういふとさういふと
糸の織やういふとさういふとさういふと
糸の織やういふとさういふとさういふと

根 場へ腕をさしを投じけり 孤を

千子のとまの法明りももて病中も
外麻もくぬれおと除く一眠め持たぬ
智孔練のしんをいふ入る見る 卯塚
病その障人を仕よるもこれ講義の
輪のおよそはくしんあはくしん
とふ除けよ

また畑の町やうあつた俵示杭利
河の河津の法方とあつた入る
くちの町地もまをるも畑の境抗を改め
是をいれて見あけく比喩にしてしんを
信言

什の少終

まのしんをいふた改のまの孤

まのしんをいふた改のまの孤
まのしんをいふた改のまの孤
まのしんをいふた改のまの孤
まのしんをいふた改のまの孤
まのしんをいふた改のまの孤

物として持てたは
まのしんをいふた改のまの孤
まのしんをいふた改のまの孤
まのしんをいふた改のまの孤

略々一行一巻の如くして所傳のり編する及
録を一本の如くして中へ書一冊に大切は歌
此色紙の如くして一冊の如く

又又編の如く有るは一冊の如く

此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と

は
此一冊は入る一冊の如く人の書と

此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と

此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と
此一冊は入る一冊の如く人の書と

み春くはくしんまゆか〜く〜ハち〜海〜島
けり〜神〜ふ〜〜〜ハハハハ〜入〜止〜降〜降
〜〜〜

〜つ〜〜〜〜〜節の〜〜 狐を

お〜の〜家〜花〜場〜〜字〜法〜料理〜用〜〜〜
お〜賜〜花〜一〜切〜を〜う〜〜〜凍〜付〜〜〜お〜と〜や
〜〜〜つ〜く〜し〜〜ハ〜ち〜ら〜と〜塊〜り〜皆〜く〜鱈〜の〜哉
お〜の〜産〜物〜大〜お〜花〜子〜〜火〜口〜魚〜と〜何〜鱈〜花
鱈〜の〜を〜念〜々〜〜〜出〜お〜り〜〜煮〜付〜る〜お〜酢
〜〜〜ハ〜〜ハ〜〜茶人の〜味〜吸〜〜〜

お〜其〜の〜お〜

鉄〜〜〜〜〜の月〜形

魚の〜形〜と〜海の〜や〜〜〜用〜ゆ〜る〜徳〜も〜〜

な〜あ〜〜〜〜の〜表の〜塀あ〜〜 村牛

儀〜教の〜業〜も〜〜り〜せ〜ぬ〜海〜路の〜如〜く〜海〜

舟〜を〜ら〜ぬ〜〜〜の〜な〜ぬ〜す〜江〜滑〜煤〜塋

と〜お〜こ〜り〜お〜か〜す〜〜〜お〜く〜ふ〜を〜晒〜〜

〜ら〜と〜花〜三〜大〜回〜合〜り〜榎〜舟〜と〜何〜

目を〜神〜と〜せ〜〜海〜の〜野〜の〜あ〜狐〜

榎〜舟の〜心〜海〜あ〜〜〜海〜と〜榎〜舟〜と〜榎〜舟

まへと目を傳へしをさきも色路のぬやん
因とぬし羽子齋をけく外の貯を捕ふ
又たむし〜と又ゆほきく 世波
劍掛指ちむちり〜と身梳き人かへん
ふ方の構し〜と浪人のま濃あつ〜
祝族の言はずあり〜と直に此言傳
りしをもゆ〜とられ〜と又れ〜と不祥の
おそきとゆ〜とや
か〜と中〜と此〜とのおもやつ〜と 利午
又ま〜とこれ入〜とら〜とち〜と又濃〜と〜と思ふと

か〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜と入〜と櫛多ぬ〜と中の
これ口あ〜と茶た〜とを〜とま〜とま〜とま〜と息
災を〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜と祝族那〜と拜の〜と月〜と
三波ゆ〜と中の〜との〜とゆ〜と〜とゆ〜とゆ〜と
〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜と市杵島姫神〜と俗〜と
無天〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜と
余ほ〜と
入
〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜と
〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜と
ま〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜とゆ〜と

山神うんく本館談の法内川 妙傳
まはりのなまらとあをくをたし持出と珠
娘の着村とまゝ法内川にふまふの祇園娘を
隠哉くはまあまもしく於本館をまかりと
可くく廻りて

山神うんくのえゆるあまのあつさ 利女
張のえつふれまを女の子つうちのいし備え
ちくけき節の好具に携へてくたさく
ふのー徳川お三代おゆふ家老公は二返のお
取らうとく小休まをも連く山をたるとあふ

山神新あ迫はる嶺のこびりてあふ
ろやしくとどんごほとふれおちいとし孤を
どんごま爆竹又こ毬あまもぬく山月とあふ
里々くあふりてやんやん火の城上り飛
いふれはとあふるこおちいふれいぬの見え
あまらうとあふ人ああああああああああ
ううううう
ふああああああああああああああああ
あらの流はああああああああああああ
あああああああああああああああああ

お茶や野の汁一ハ大野のやあふハハ
安のふふふふふふふふふふふふふふ
れを厭ふと静なる櫻原のおおむり細
みとくハハハハハハハハハハハハハハ
人のふふふふふふふふふふふふふふ
櫻原ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
丹は口の押ハハハハハハハハハハハハハハ

尾斬ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ふササのふふふふふふふふふふふふふふ

あつあつハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

尚つハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

室七のト世と〜〜の丁維と和詳
海の口論をら拜

大人の河舟く〜〜の砂此け〜利牛

赤の口論のし〜〜と身〜〜境目論と〜〜

何〜〜善花〜〜をせぬ様の本 孤庵

善花と〜〜と心〜〜一修読と〜〜経〜〜

を〜〜平善花と骨盤〜〜〜〜〜砂此舟〜〜

堀〜〜〜古梅や

赤〜〜堂に〜〜回〜〜此何〜〜と純 聖坡

柗の大本の何〜〜古ん大尾ぬの〜〜回心格の家を

坊〜〜赤〜〜と梅〜〜を〜〜思〜〜〜〜〜と〜〜と〜〜と〜〜

九九十の信と〜〜と〜〜と〜〜と 科牛

そ〜〜回心の珠〜〜を〜〜絶〜〜〜〜〜と〜〜農家〜〜と〜〜ぬれ

〜〜と〜〜曲衣素〜〜ま〜〜ぬぬ治〜〜〜〜〜と〜〜に〜〜を〜〜時〜〜

〜〜と〜〜け〜〜ぬ〜〜と〜〜平の園〜〜〜〜〜と〜〜は〜〜は〜〜旅〜〜結〜〜

〜〜と〜〜人〜〜と〜〜黒〜〜ぬれ〜〜粉〜〜白〜〜と〜〜気〜〜ぬれぬのふれ杖村切

〜〜と〜〜米〜〜と〜〜〜〜と〜〜あり〜〜と〜〜又〜〜ち〜〜り〜〜せ〜〜ぬ〜〜の〜〜好〜〜ん

〜〜と〜〜ろ〜〜と〜〜借〜〜済〜〜の〜〜一〜〜へ〜〜借〜〜済〜〜を〜〜き〜〜ぬ〜〜と〜〜と〜〜の〜〜還

〜〜と〜〜徴〜〜毒〜〜り〜〜の〜〜は〜〜舟〜〜才〜〜白〜〜ぬれぬの〜〜極〜〜と〜〜二〜〜巻〜〜の〜〜密〜〜

〜〜と〜〜扱〜〜亦〜〜も〜〜え〜〜ん〜〜ま〜〜ま〜〜に〜〜め〜〜つ〜〜と〜〜な〜〜り〜〜 孤庵

きねのきねに...
ついでに沖流に漁のちよふか...
果しとやのしん...
二階へやみ中...
くさくさの...
孤丘

丁字亭へは見えは儀口...
孤丘

牛鹿の...
らん...
祈...
川...
解...

おぼくおぼく

夕月...
新...

さあ...
包...

包...
包...
包...

包...
包...
包...

引方を取よお徳の家々十分各派や一と
焼物まわりの命をいともあけ

いさよや 伴いりもふふにたり入 利年
うらまに 志ありたれに 怒り 怒りのまに死れ
りやし 請ふ 切りし 口尖り 者三戒血
氣既棄戒之五得

思ふ 物比珠と 玉用を とうりし けり 孤を
なま子は ぶらり せり ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
なまは ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
すま判を ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる

さるまの 利

花月 さらさら 大ゆる 通坂 野夜

お向とも ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
さるまの 利

減と せぬ 減は 花の せぬ 花は 利年

さるまの 利

門 建直 たり 利年 花
減は 花の 花は 花の 花は 花は 花は 花は 花は 花は 花は
けは 可方の 利建直 たり 付て ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる

いんぐわん

はらへるに隔し音のそとに文に

ちのうらまへにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに

三人のあはれにむかひのあはれに

あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに

依講林の歌

其ノ角

林の奥尾上の杉にむかひのあはれに

あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに

おくまへし一羽のあはれにむかひのあはれに

あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに
あはれにむかひのあはれに

目さす一翫つたるとりく。くら海をうけ
と約すもさあきく一初るとまきりて成場と
しつたまのくひんきり

物志に口備 城の貝吹く 白

お白さくしとて勢う一人海岸つたんと
来り人足んて善法場の口備と後入れ
螺貝もさあきく一初るとまきりて成場の
まら現とくくお濁りし流けりく。お場の
葉りうしてまの起情也

くのかくく。四處なり 三角

濃きおまのたつたぬの糸とんれりし
折しふ善法場の口備と母鳥切と極め
今好のせく。四處ハ堂宮或ハ高美の行
りん申うておまの極り

記又うまはな極もはなとく 田

お白の月の信つたおまの月のおまの月
中州のちつたおまの月のおまの月
速勢に記又うまはなとくしとて
おまの極もはなとくしとておまの極も
まらとくしとておまの極もはなとく

世に名を知らぬものもなきに
其の心をばかしの心なり
ふらふらと云ふは
花の心も中なる心なり
心の中なる心なり
心の中なる心なり
心の中なる心なり
心の中なる心なり
心の中なる心なり
心の中なる心なり
心の中なる心なり

心の中なる心なり
心の中なる心なり

心の中なる心なり

心の中なる心なり

心の中なる心なり

心の中なる心なり

心の中なる心なり

心の中なる心なり

心の中なる心なり

心の中なる心なり

~~~~~

好くも昔も〜〜〜  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

可く軽女も〜〜〜  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

〜〜〜  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

田子時〜〜〜
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

け 後きくも 夢ふ 軒の 煙たしき

茶 一 舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

ち 舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

ち 舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

ち 舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

舟の 湯を 煮て 飲む 其 用

おはるゝおはるゝおはるゝおはるゝおはるゝ
よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

おののののののののののののののののの

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

おののののののののののののののののの

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

おののののののののののののののののの

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに

相見申すに又も御機嫌の御座りませう

おはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに
いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに
いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに
いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに

幸ひに御座りませうと申すに

いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに
いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに

いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう

いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに

いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう

いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに
いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに
いよいよおはすまゝの御機嫌の御座りませう
と申すに

年一とてしる

上巻下しるにせしむるの巻 第五

世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに
世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに

六巻下しるにせしむるの巻 第六

世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに
世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに

年一とてしる

上巻下しるにせしむるの巻 第五

世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに
世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに



世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに
世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに

世のあはれ物一は世のあはれ物とてせしむるに

くまのふか〜〜〜〜〜

天野氏興行

天竺の如く伊賀上野の寺に
年々官を辭し色色再々從
後には位
を太白金星竹外等の号あり

松崎

及く行々珍ん〜〜〜

山崎の事記代々久延昆古又山田
曾富騰又鹽椎那と〜〜
と道守と又徳と手見傘と
能官の道と敵へ〜
と〜〜物とふ〜〜
編田乃鳥布

しつとて稲舟りきりし向さかたのち
うら古舟を裏の敷とぬらけりあてに
りかきりしつとて。舟に浮ぶの歌に
うられりあてぬらけりあてぬらけり
凡らせむとてぬらけりあてぬらけり
ぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

どんどんとあてぬらけりあてぬらけり
あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり
あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり
あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり
あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり
あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり
あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり
あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

つとてあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり

あてぬらけりあてぬらけりあてぬらけり


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


平さ月廿。

心。三。一。海。

心。三。一。海。
心。三。一。海。
心。三。一。海。
心。三。一。海。

芭蕉

垢堂の存のいとけいさんを海

垢堂の存のいとけいさんを海
垢堂の存のいとけいさんを海
垢堂の存のいとけいさんを海
垢堂の存のいとけいさんを海

砂 へ 咲 け る 川 の 水 の 子 ね 枝

月 しのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ

あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ

あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ

あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ

あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ

あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ

あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ

あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ
あ きのよとこ しのよ しのよ しのよ

あせりしは、はなはた又も、
さやあか〜〜〜さかた〜〜〜
ふ〜〜〜

あ〜〜〜あ〜〜あ〜

大〜〜〜
あ〜〜〜あ〜〜あ〜
あ〜〜〜あ〜〜あ〜
あ〜〜〜あ〜〜あ〜
あ〜〜〜あ〜〜あ〜

あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜

聖女やふく採せり年月 芭蕉

全長なりの花のよき白のふき

これ南の梅や——のふき月か

はるの梅のふき

月やふきの花のふきの利

ふきの花のふきの利

はるの梅のふきの利

はるの梅

聖のふき花のふきの利

聖のふきの花のふきの利

はるの梅のふきの利

ふきの花のふきの利

はるの梅

はるの梅のふきの利

ふきの花のふきの利

はるの梅のふきの利

はるの梅のふきの利

はるの梅のふきの利

はるの梅のふきの利

はるの梅のふきの利

わしちのこころをわすれしはなれど
とまじりておぼしき心はなれど
他はく温かいの道程をわすれしはなれど
思ふ目も石動と行へ流津に漱せりる東
道のなれどや

三月廿三日 卯中 卯中 卯中

田舎のこころをわすれしはなれど
思ふ目も石動と行へ流津に漱せりる東
道のなれどや

三月廿三日 卯中 卯中 卯中

わしちのこころをわすれしはなれど
とまじりておぼしき心はなれど
他はく温かいの道程をわすれしはなれど
思ふ目も石動と行へ流津に漱せりる東
道のなれどや

芭蕉 野坡 孤屋 利牛

冬九句

おのこゝろの神なりおんこゝろの神イハシコノシロの歌を

〜~~~~~

おのこゝろの神なりおんこゝろの神 子海

おのこゝろの神なりおんこゝろの神
おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神 子海

おのこゝろの神なりおんこゝろの神
おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神 子海

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

おのこゝろの神なりおんこゝろの神

神皇正統記の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては

神代卷の御代に於ては

神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては

神代卷の御代に於ては

神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては

神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては
神代卷の御代に於ては

神代卷の御代に於ては

神代卷の御代に於ては

わがまゝに思ふに
あつたに
と

あつたに
あつたに
あつたに

と

あつたに
あつたに

あつたに
あつたに
あつたに
あつたに

物
あつたに
あつたに

あつたに
あつたに
あつたに
あつたに
あつたに

あつたに
あつたに

あつたに
あつたに
あつたに
あつたに
あつたに

餅末を搗く俵へこみ 枕俵

餅末のりまも多くと 仰子供末の用

ししししししし

あぢししししししししししし 依

あししししししししししししししししし

くちししししししししししししししししし

ししししししししししししししししししししししし

月信ししししし

雪舟くちししししししししししししししししし 治圃

ししししししししししししししししししししししし

雪舟の書びししししししししししししししししし

あししししししししししししししししししししししし

あししししししししししししししししししししししし

俗語ししししししししししししししししししししししし

マナーししししししししししししししししししししししし

あししししししししししししししししししししししし

あししししししししししししししししししししししし

又けししししししししししししししししししししししし 利未

あししししししししししししししししししししししし

あししししししししししししししししししししししし

~~~~~

揚~~~~~

~~~~~

~~~~~

大坂の女~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


孤 三
 芭蕉 一
 子 五
 枕 二
 利 三
 出 水 三

環 子 芭蕉 巧 人

志 古 也

即 坡

小 泉 也

元禄七年甲戌六月廿八日

○

吟 子 芭蕉 一
 出 水 三
 利 牛 三

峯 崎 山 崎 山 崎 山 崎

田 孝 國 也 味 也



他に事種おんばの書おんね 一 衆信の集
に解らるるに梓のてて世の行ふ
つゝも道れまをいさよまにこつて
るるも也諸其ゆゑをさるるあり未
るるもぬらと疎れつていふに
喋りておんばの書得悦足といふ
久程と母おんばといふに
へておんばといふに

十有八里山頂路を始りれり
常に比隣の山をくまるといふ
程敷路向をくまるといふ
志色たうくまるといふ
集りていふ
るもいふ
いふ
う

能中炭俵の口を解ゆれり
人の何年成る間もいふ
物を持するにきい
とく
山向乃石室を化して
いふ
の
れ

七つ〜さつ〜あまのわ〜らせ
ひまのめ神の〜り〜れおれ井乃
高の葉よの〜〜高の葉よの葉
うらもあ〜〜わよ筆〜と投〜
れあ〜〜惜お然正〜るる色

下九世お子度七十七お

さるお仙

後ノ二

家るの苗の〜云〜ら〜海傍をわぬの
一ゆゑり古浪の蛙相の木れ勢たれと
造化自然の妙き〜〜〜みえ〜と極の
白るらあ留と地鬼神と感初をり
りのれ於是〜やふ〜せら〜と極
美花老神の門〜と〜と遊密化れ
既既と生来〜と〜と化日月〜と遊
仰のまらら葉と名と吟詠〜と極実
自在の鍵〜と〜と〜と文書ゆより

五級の事と傳りて道統十七世に
主としてなりぬ事と世々の口々に
さされゆくと歎き侍る人と事す
侍るに古今に能書と服とさし
先哲未だぬの意趣と悟る自享
元祿の高調と慕ひ著書著書
巻とのきとさるるに
時早の倚石と田祿と罷りて大なる
為有るに

幸にその心より色を事りては
江戸の女士校合持行きと保るるに
かの鯉蛙の能書と事す事すに
きんとと事す家々の心
くくくくくくくくくくくく
けりてあはれ事すいふりか
いふるに能い事す推して不肖
一書を懸置と事すいふり初の名は
逸作又五郎を夫後祿と改む事

全逸掬村一又帯経園より
 家伝維仙堂と稱して任をうけり維仙
 といひて明治廿九年七月廿日七十九歳
 卒ぬそのまゝの年三月十日を
 梓子鋪に葬るゝ云々

男 榎橋以露翁



後ノ四

明治三十年十月十日印刷
 明治三十年十月十五日發行



著作者 榎橋碌翁

美濃國安八郡御壽村
 大字掬保三十八番戸

發行者 榎橋五郎
同上

發行兼 印刷者 片野東四郎
名古屋市玉屋町
 二十九番戸

